

「東南アジア最高峰、ボルネオのキナバル山に登る」

第4支部 三共商事(株)
理事 小川秀一

今回はハイキング同好会50回を記念しての開催である。最初にこの話を聞いた時には、ボルネオの山とは余りにも唐突な話だなあと真剣には考えていなかった。ニューギニアもボルネオも殆ど区別がつかない。「どだい、ボルネオってどこにあるんだ!」。熱帯の鬱蒼としたジャングルを探検隊が進んでいく。高い木の上には極彩色の大きな鳥がいて甲高く鳴いている、警戒してか声を上げ大きな猿が長い手で木から木へ飛び移るのが見える。鼻輪をした原住民が猛毒の吹き矢で探検隊を狙う。大きな毒蜘蛛がいる。毒蛇も木陰から狙っている。うかうかするとヒルが上から降って来る。沼地にはワニが人間を引きずり込もうと水面に目だけ出して狙っている。そんなイメージしか持ち合わせていない。しかし、少し調べた結果、東南アジア最高峰、世界遺産の山、綺麗に整備された登山道などの話を我が家でしていると、聞きかじった山好きの嫁さんが、段々と行く気になってきたらしく、何日かすると周囲の人にも話してしまった。もう、お仕舞いだ。大変なことになってしまった。体力が続くのか? 4,000mを超えるが高山病にはならないのか? などと色々迷った挙句、こんな機会は又とないということで、夫婦での参加を決意した。

9月16日11時30分にマレーシア航空のカウンター前に集合、今回の参加者は8名であるが、5日間の中、前半は好みによって3班に分かれての活動である。内田さん・森山さんのお二人はジャングル探検グループ、乾さん・磯部さん・原さんの奥様、小川夫婦の5人はキナバル登頂グループ、そして原さんの旦那さんはお一人だがスキューバー・グループとなる。ただ、原さんの旦那さんは翌日の別便でボルネオに向かう。

いざ出発!! 成田空港から東マレーシア(ボルネオ北部)のサバ州コタ・キナバル空港までは直行便で6時間の飛行である。乗った感覚では意外に近い。

現地時間の午後6時15分 コタ・キナバル国際空港に到着した。ローカル空港を想像していたが、こじんまりとはしているが美しいオシャレな空港であった。ちょうど日没の時間に重なり、乗っていた乗客全員は幸先良くガラス越しに見える美しい南国の夕焼けに目を遣りながら、これから始まる楽しい計画に胸をはずませた。

空港からコタ・キナバル市内までは日本で考えられないほど近い。「これだと錦糸町から東京ぐらいだよな」。肌の色が少し濃いポリネシア系のガイドさんに案内されながらワンボックス・カー2台に分乗して夕食のレストランに向かう

こととなった。ボルネオでの最初の食事である。原さんの奥さまは昔取った杵柄英語を駆使されてガイドと会話をされている。これで心配された語学の問題も解消。旅行も快適・安心になった。

車窓からは海沿いにヤシに囲まれたリゾート・コテージやゴルフ場などが南国ムードを醸し出している。ヤシの並木が続く道路は繁華街に近づいてきた、色とりどりに配色された街のネオンはけばけばしさを感じさせない。夜の綺麗なコタ・キナバル中心街に入った。さすがに57万人の人口を誇っているだけあり、車も人も多くなってきた。そして、とうとう渋滞である。少し行くと、道路を挟んだ公園からは人が溢れ、その人たちは一つの方向に向いている。「何でこんなに人が集まっているのかなあ」「何か催し物でもあるんですかねえ」。ガイドさんの話では独立記念日のお祭りらしい。道路が整備されていて無秩序な混雑ではないので苦にはならない。ここの主要道路は1km毎に大きな交差点があり、これが全てロータリーになっている。右折もUターンもノンストップである。今、通過してきたロータリーの内側の植え込みには直径2mくらい大きい真っ赤なブーゲンビリアが3輪飾られている。「あんな大きな花があつたら怖いですよええ」。ボルネオには世界最大の花 ラフレシアがあるのだ。なんでも大きいボルネオという印象が強く、もしかしたら、赤道直下のジャングルではトンボも、チョウチョも、カブトムシも、蚊も、ゴキブリもみんな大きいのではないか・・・と期待が膨らむ。

このあと、市内の中華街でボルネオで最初の晩の小宴会が始まった。しかし、「ジャングル探検グループ行方不明事件」や「両替は大丈夫か事件」など色々あったのだが、紙面の都合で割愛させていただきます。

さて、ここでジャングル探検の内田さん・森山さんグループと分かれ、われわれキナバル登頂グループ5人は、一路キナバル山の麓にある宿泊施設キナバル・パイン・リゾートへ2時間の行程で車を飛ばした。外は街路灯一つない真っ暗である。そのうち大粒の雨になった。フロントガラスで活躍するワイパーの向こうにはヘッドライトに照らし出された夜のつづら折りの山道である。延々とそして単調に続く。夜空が一瞬明らみ、遠くで雷鳴が聞こえてくる。乗ってから一言も発しないおとなしい運転手はかなりのスピードでこの道を飛ばす。一刻も早く送り届けて休みたいのかも知れない。だが、最初はハラハラしたが、旅の疲れでそのうち我々は寝入ってしまった。気が付くと街路灯で照らされたデコボコ道になっていた、道の両側には人気のない朝市の露店だけが暗がりには並んでいる。今晚の宿泊施設の近くになったらしい。

キナバル・パイン・リゾートは標高1,800mを超える所にあるのだが、立派なリゾート施設である。入口ゲートをはいると施設はジャングルの中にあるのだが、道路は整備され、しばらく行くと木造の管理事務所があり、同じ棟に併設されたレストランも立派である。事務所を中心に熱帯の緑の中にコテージが散在

し、レンガ色の屋根と白壁で統一された各棟は、一棟が二階建てで各階2部屋ずつの4部屋で、ちょっとした高級リゾート・ホテル並みで清潔だ。温水シャワー、トイレ、ベッド、テーブルが付いている。各部屋の前は手摺に囲まれた広いデッキ・スペース。そこにデッキチェアがサイドテーブルを挟んで2脚置かれている。2階の部屋のデッキ・スペースはそのすぐ前面に別に建てられた屋根付きの廊下で結ばれているのでデッキ部がさらに広く感じられる。もうちょっと早く到着すれば、デッキチェアに身をゆだね、夜のジャングルを眺めながらブランデーでも一杯といった感じだ。しかし、到着はしたが、もう午後11時を過ぎている。土砂降りの中、早々に部屋割をして、明日の登山の準備を完了して、眠らなければならない。部屋のシャワールームは時代がかってはいるが温水のシャワーが気持ち良い。明日はやはり雨か！

午前4時頃、夜明け前の暗いうちから、無数の鶏の声が聞こえてきて目が覚めた。まだ起きるには早い、思い切って起き、静かにドアを開けてデッキに出た。雨は止んでいる。空を眺めた。満天の星々。オリオン座が明るい。スバルは小さな星々まで見える。はくちょう座、こぐま座・・・銀河が東から西へ雲のように見える。今日はすばらしい晴天だ。

明るくなるに従い、山頂に特徴的なグレーの巨岩群を冠したキナバル山が見てきた。

このジャングル越しに圧倒的存在感で聳えるキナバル山をじっと眺めていた。すると、赤道直下に繁茂し生息する無数の生命が競い合って山の斜面を駆けのぼり、天空へと向かい、それらが巨大な一つの力となって、更なるエネルギーを求めてやまない意志となってここで昇華し、それが形になった様な山に見える。この山はこの国の人の神聖な山なのだ。事実、4000mを超える山頂付近には、無数の触手が天に伸び、それらがけた外れに大きい玄武岩のピークとなって、我々の魂を揺さぶってやまない異様な光景として目に飛び込んでくるのだ。

7時からレストランで朝食、料理の品数は限られているのだが、バイキング方式の立派な朝食であった。8時にこのキナバル・パイン・リゾートを出発。昨夜見た朝市は様変わり状況で沢山のひとと南国の農産物を積んだ車でごった返し、大混乱・大渋滞、われわれの車はその中を公園事務所に向かう。キナバル山は1日200人以内と入山の上限人数が決められていて、公園事務所で事前申請の上、登録IDカードを貰わなければならない。このカードには “Take nothing but photographs. Leave nothing but footprints. “ と粋な言葉が書かれていた。

ここで、ガイドが入れ替わり、山のガイドとポーターの2名で我々を案内してくれる。

ガイドはドゥスン族の大人だがポーターは12歳くらいの子の良さそうな可愛い少年である。この少年には我々の負担を一部軽くするために各人の荷物から一人上限5kgの荷物を集めてリュックに詰めて運んでくれる。ガイドは公認免許を持っていて、我々の荷物を運ぶことはない。多分、ガイドとポーターの少年とは徒弟制度のような関係があって、このガイドも昔はポーターをやって足を鍛え、語学などを勉強して今があるのかも知れない。公園事務所で30分以上待たされ、4km離れたティンポポン登山ゲート(標高1866m)が9時30分になってしまった。ここで昼の弁当を受け取り、さあ キナバル登山のスタートである。今日は5~6時間の行程になる。

登山ゲートを潜ると、ジャングルの中に良く整備された山道があり、各国から来た登山者でごった返し、行列状態になっていた。ここでも中国人の多いのに驚かされる。日本人は我々の他にはいない様だ。まだ足は軽い。目標は6km先のラバン・ラタ・レストハウスだ。ゲートより1km毎に立派なシェルター(休憩所)があり、そこは屋根があってベンチもトイレも水飲み場も揃っている。日本の山も見習うべきであろう。2kmのシェルターで休みを取ると、乾さんは弁当のサンドイッチを頬張り始めた「食べないと駄目ですよ！ いっぺんに食べても消化しませんからね。小刻みに食べるんです」。5~6匹のリスが弁当を狙って近づいてくる。ちょっと面長だ。磯部さんも原さんもこの三木のり平のようなリスに向かってシャッターを切る。

4kmを過ぎるころから、右ひざの筋肉に違和感があり、5kmでとうとう足がつってしまった。程なく左足も同様な状態になった。ご存じの通り登山でツルと致命的である。屈伸運動などをして回復を図ったが、どうも駄目だ。激痛承知で足を動かしながら騙しだまし登るしかない。足を止めると筋肉が冷えてますます悪くなるからだ。あと1kmだ。敗残兵の様になって歩いている。すぐ後ろの嫁さんに続いてくれている乾さんとガイドさんが心配そうにしている。いつもの同好会の乾さんなら見捨てて、サッサと行ってしまおうところだが、全員登頂を目指してくれる今回は見守ってくれている。乾さんの責任感の強さと優しい心を強烈に感じた。

午後になると天気が悪くなる。それがここの一日のサイクルなのだ。麓からガスってきた。気温が急速に下がる。まずい雨が降りそうだ。だが、一歩いっぽと進むしかない。一から五十ぐらいまで口の中で数を数え、そのテンポで出来る限り休まないように足を運んだ。……。そうして、やっと小屋が見えた。もう目の前だ。だが、この20mがきつい。いち、にい、さん、し……。ああ~やっと到着！！

苦しかったが雨が降る前に到着できて、本当に良かった。ラバン・ラタ・レストハウスは標高3,200mに位置する小屋だが素晴らしい小屋だ。東に向かって翼を広げたように「く」の字形に少し折れ曲がった建屋は78人収容できる2階

建て構造の山小屋である。中央にある二重のガラス戸になった玄関口を入ると1階はレストランとその厨房と倉庫、スタッフルームで、その玄関脇の階段を上がり2階には中央の長い廊下の両側に十数部屋の客室、一室ごとに二基か三基の2段ベッドが設置されている。また、2階「く」の字の両翼の両端2か所には温水シャワールームが3つと、便座トイレが3つ、そして大きな鏡が付いたオシャレな洗面台が2つ、それぞれ同じ構造で設備されている。

私が到着すると、だいぶ前に到着していた筈なのだが、入口玄関のガラス戸を出て、磯部さんと原さんが待っていてくれた。優しい人たちである。それに引き比べ、「さあ、ビールにしましょう！」と入口で低俗な欲望が口をついて出てしまった。直前まで、目の前にぶら下げた人参のように、それだけを楽しみに苦しく喘ぐ五体を運んで来たのだが、反省である。午後2時半、私を最後尾に全員無事小屋に到着。まずは、タイガービールで乾杯。

乾杯のビールを飲みながら、ふと窓際の席の外に人影を感じた。そうなのだ、今までガスって視界がなかったのだが、少し晴れてきて陽光も射してきた、青空も見えている。全員急いでベランダに出る。もうそこには5～6人がカメラを片手にしている。そして、その後ろには今までガスで見えなかったキナバル山の頂上付近のいくつもの巨大な岩肌が西日を浴びて忽然と現われていた。中腹付近を覆うハイ松の鬱蒼とした群生地帯の間にも数百メートルにわたった一枚岩の斜面が何か所も見える。その岩の表面を湧水が洗い、その水が西日を反射して岩場に白い残雪があるかのように照り輝いて見えている。そうこうしている内にキナバル山全体が見えてきた。空はあくまで青く、それに映えてあくまで雄大な山である。「明日、この山に登るんだ！！」

乾杯のビールの続きで夕食の時間になってしまった。明朝午前2時にこの小屋を出る。夕食を早々に済ませて、明日の登山の準備をしなければならない。

キナバル山は標高4,096mあり、その頂上付近は数百mにわたって多数の玄武岩の一枚岩を縦に重ねて構成された絶壁になっている。空から見ると、頂上付近は南向きに左右2つのピーク群で飾り付けられたティアラ(女性の王冠型の髪飾り)のような形になっている。その髪飾りを作り出しているパーツとしてのピークには名前がつけられ、向かって正面左からサウスピーク、セントジョーンズピーク、ローズピーク、ビクトリアピーク、そして右にはキングエドワードピーク、キングジョージピークである。また、2群の間にもドンキーイヤーズピーク、マッシュルームピークなど形の特徴から付けられたピークが沢山ある。我々はティアラの正面の絶壁を構成する一枚岩同士が斜めに作り出した継ぎ目と多少の段差を利用してアタックし、ローズピーク(4096m)を目指すことになる。とは言っても、登山道はロープや手摺、階段で良く整備はされているようだ。ここ1年間で遭難者は20名、死者ないないそうだ。

コタキナバルが海に面した標高0 mで3.2℃、1気圧(1013.25 hPa へクトパスカル)とすると、計算上でローズピークの標高4,096mでは5.38℃、0.62気圧(627.03 hPa)となる。つまり、頂上付近では真冬の寒さで酸素が通常の62%となる訳だ。酸素は3分の2以下。どうも息苦しくなってきた。

午前1時起床、身支度をすませて1階のレストランに向かう。登山前の食事が出るのだ。深夜というのに、もう各国まちまちの服装の登山者でごった返している。昨日の夕食と殆ど変らないメニューだ。まずくはないのだが、時間が早いので食欲がわかない、腹に押し込むようにして食べた。

午前2時、頭にはヘッドランプ、雨や防寒対策で比較的重装備の服装で、いざスタート。取り敢えずの目標は絶壁手前のサヤッ・サヤッ小屋だ。ヘッドランプで進むが、足元しか見えない、後は真っ暗である。真っ暗な宇宙で船外活動をしていた若田光一さんを思い出した。前後に歩く人の気配はするが、全く見えない。歩く登山道の左右が絶壁であっても真っ暗で分からない。十分ぐらい歩くと昨日のしんどさが蘇って来た。前にいた磯部さんと原さんには離されて、随分先を行っている様だ。泣きごとを言いたくても言う相手の顔がない。暗くて表情がつかめないのだ。まずい。取り敢えず対処できる事をやるだけだ、空気が薄いのでから一回々の呼吸を通常の呼吸より深くしよう。そして、「いち、にい、さん」作戦だ。しかし、途中足元がふら付いたのを見て取って、ガイドが先導してくれた。ガイドの歩きはメトロノームの様に一定のテンポと歩幅である。驚いた事に、急坂でも平坦でも全く変わらない。という訳で、メトロノームの様な歩きを習得することにした。

色々な作戦を取りながら進むが、苦しい事に変わりがない。やっと標高3668mのサヤッ・サヤッ小屋だ。この小屋は守衛所の様な造りのゲート小屋で、登山者の通過をIDと名前を確認するのだ。開いている小窓には人がいるのだが、ローソクが5~6本なにやら怪しく揺らめく光を放ち、その中に詰めている人がチベット山岳仏教の僧侶の様にも見える。多分昨夜から泊り込んでいるのだ。ここで一休みと思ったが、ご来光の時間の関係で休み無しで進むことになった。ここからは登りが急になり、危険なところも出てくる。

片側が絶壁の所もあるが、ロープと岩に記された白い線を頼りに、淡々と登って行く状況が続く。急な岩場の途中、ヘッドランプが2つ見える。磯部さんと原さんだ待っていてくれた。「立って待っていると、寝むちやいそうになったわ！」こんな絶壁で危険な話をされている。暗闇の登山は単調で自分との戦いだ。さらに進み、急傾斜の岩場を抜けると遮るものが無いのか、急に風が強くなり温度が下がってきた。頂上が近いのだ。途中動けなくなっても、帰路が同じ道なのだから、待っていて拾って貰えばいいと安易に考えていたが、とんでもない。動かなければ凍死してしまう程、寒くて風が強い。緩斜面であるが、歩くのが辛い。呼吸を深くする。「富士山の高さは超えたんですか？」後ろに付き添っ

てくれている乾さんに尋ねてみる。「うーん、あと10mですね」。乾さんの腕時計型高度計はGPS機能付きで、誤差1~2mらしい。とにかく富士山を超えよう。一定のテンポで歩く。

山頂まであと100mである。東の空が白んできた。ご来光の近づいているのを感じる。自分の為にご来光が見れないといけないので、さっき乾さんと嫁さんには「もう大丈夫だから先に行って下さい」と言っている。いま、乾さんは到達したらしい。頂上で「駆けあがれ！ 走れえ！」と先に行く磯部さんと原さんにハッパを掛けているらしい。

「Congratulation！」山頂には、ここが山のとっぺんである事を示す小さ目の看板があり、その脇で少し前からマレーシアの青年と思われる登山者がうずくまっていた。一歩いっぽにじり寄るように近づくと、日本人のような顔立ちの、その小柄な青年は私に向かってそう言ったのである。すると、私の中でそうだ私は今、この赤道近くの4000mを超える山の上に来て、そこの頂上に到達したのだと全身で感じた。「コングラチュレーション！」

私もその青年に言葉を発した。純粋な瞳が微笑んだ。そして、青年は右手を控えめに差し出し、私もそれに応じた。強い握手だった。満天の星空が段々と白んで、薄くなっていく。

明るくなってくると共に、今まで苦勞してきた登山道が眼下に見えて来た。登って来るヘッドライトの明かりが点々と連なり、今来た登山道を示していた。頂上には三十人位の人がいるのだろうか。我々はいまローズピークの上にいるのだ。そこからはセントジョンズピークの異様な形のピークが間近な存在になって見える。いま登って来た方向には、幾何学的曲線が美しいサウスピークが玄武岩のなだらかな曲面となって広がっている。さっきの青年がバックから綺麗に畳んで大事に持ってきたハンカチ大のマレーシアの小さな国旗を両手で広げ友人と肩を並べて写真撮って貰っている。だいぶ明るくなってきた。乾さんと磯部さんはローズピークを岩から岩へ修験者のごとく移動し、眼前にある様々な連想を呼び起こす異形の巨大オブジェをカメラに収めていた。いま、繰り広げられている光景を見ながら、まさにこの時間の存在の為に我々はここを目指したのだ。それは間違いない。

頂上の30分が長く感じられた。ガイドが少し下の岩の上から「帰ろう」と指を下に向けて合図している。下りは登りに比べれば数段楽だ。登っているときは真っ暗で何も見えなかったが、いまはサウスピークもドンキーイヤーズピーク(ロバの両耳の形をしている)も青空に映えて、下りの楽しい景色となっている。我々は天候に恵まれた。

午前8時頃、今朝出発したラバン・ラタ・レストハウスに戻った。一日が終わ

った様な気分だが、まだ朝食前なのだ。まず、祝杯のビールを仕入れ、ビュッフェ方式で朝食の料理を取って乾杯！「おめでとう！おめでとうございます！・・・」。5人には満足感が広がる。イスラム教の国にあって、朝からビールで乾杯している姿は、周囲からは単なるアル中集団のように浮いて見えたかもしれない。喜びの興奮の中 雑談しながら暫くすると、登山で体力の全てを使い果たした体を休めながら某組合理事長でもある磯部さんは「20代の若いやつにこれで示しがつく」と満足げな表情を浮かべた。若いやつが富士山に登りましたとか何とか言っても、人差し指を立てて「チッ、チッ、チッ・・・。君たちはまだまだだ・・・。ボルネオのキナバル山に登ったときはね・・・」と言ってやれる。それを聞いていた乾さんも満足げにうなずいて、「まあ、海外ですからね。まず太刀打ちは出来ないでしょうなあ」ダッハッハハハ。こみ上げる嬉しさにお二人の顔がくずれた。

スタート地点のあの登山ゲートまで厳しい下りが6 kmも続き、聞くも涙・語るも涙の苦しいドラマが展開されたのだが、紙面の都合によりここも割愛させていただきます。

ここで、キナバル山のあるボルネオ島サバ州の歴史を少しお話したいと思います。

第二次世界大戦前、17世紀のオランダ東インド会社とイギリス東インド会社の東南アジア進出の歴史的経緯から、ボルネオ島の南部はオランダ領、北部はイギリス領になっていた。そして、戦時中の3年半は日本軍の軍政下にあったのだが、終戦と共に北部ボルネオは再びイギリス軍政下に入り、戦前イギリス領だったところを一纏めにして、マラヤ連合としてイギリスの直轄支配地となった。しかし、この連合がマレー人の地位低下をもたらすものだった為、マレー人の民族主義的な反対が高まった。マラヤ連合は解体され、それに代わってマレー各州の象徴的な君主(スルターン)がその地位を回復させ、1957年8月31日マラヤ連邦として独立した。この日、新設されたマラッカ・ムルデカ・スタジアムに集まった30,000人の聴衆の中、ラーマンを初代首相に迎え独立セレモニーが行われた。ラーマンは「私たちは今、この国の運命を手中に握ったのだ」と国民に民主的独立国家マラヤ連邦への献身を呼びかけた。

だが、当初のマラヤ連邦は完全な独立国家ではなかった。マレー各州がイギリスの保護領としての地位に置かれていた。マラヤ連邦の商工業は華人と欧米人に自由に任され、華人が富を築いていくのに対し、マレー人農民の生活水準は極めて低かった。民族的衝突が多発し、共産ゲリラの破壊活動もあって不安定な状態がしばらく続いた。十数年が経ち、マラヤ連邦も安定し始め。そこで、ボルネオ島のサバとサラワク、ブルネイ、シンガポールを加えたマレーシア連邦を建国する構想が発表された。

これに対して、全ボルネオ島を領有しようと考えていた当時のスカルノ・イ

インドネシア大統領が鋭く反発。東西マレーシア国境地帯に軍隊を派遣、戦争状態に陥ってしまった。さらに、フィリピンがサバ州の領有権を主張するに至って、国際紛争となった為、国連が乗り出して1962年 サバ、サラワク両州でマレーシア帰属の可否を問う国連監視下の住民投票が実施された。この住民投票で両州とシンガポールがイギリスから独立してマレーシア連邦に加わることを決定し、1963年9月16日連邦政府加入宣言が行われた。しかし、華人の比率が多いシンガポールは、国語、国教、マレー人の特権などマレー人優先政策を続ける政府に反発していた。文化的な違いから融和は不可能として、1965年8月9日シンガポールはマレーシア連邦から分離独立した。

マレーシアの独立記念日はラーマン首相が歴史的演説を行った8月31日だが、サバ、サラワク両州が加わってのマレーシアが実現したのは9月16日である。この日をサバ州では毎年独自の独立記念日として盛大に祝っているのだ。

思い出して欲しい、われわれ8人がコタ・キナバルに到着した夜の人出はこのお祝いだったのだ。また、キナバル山頂でマレーシアの青年が「Congratulation!」と言って握手を求め、マレーシアの国旗を広げて写真を撮っていたのは彼の中で二重の意味を持っていたのかも知れない。

下界に戻り、今夜 宿泊するハイアット・リジェンシー・キナバルまでは意外に早く着いた。ホテルに着き、ゆっくりシャワーを浴びて、着替えてからホテル1階ロビーに集合。

今夜は内田さん、森山さんの探検グループと原さんの旦那さんのスキューバー・グループ、そしてわれわれ5人のキナバル山登頂グループが合流しての大宴会だ。ここはA級、B級グルメを兼ね備えた内田さんに任せよう！

タクシーに分乗して、海に沈む夕日を眺めながら海鮮中華料理が食べられるオーシャン・シーフード・ヴィレッジ「海王城」に向かう。店を入るとすぐ大きな生簀が並び、ここサバ州近海ものでいっぱいだ。大型のロブスター、伊勢海老、超大型シャコなど豊富な食材が揃っている。店内は相当広い。そこに8人掛けの大きな中華料理屋の丸テーブルが30脚くらいある。各人それぞれに席に着き、料理の注文は内田さんの独壇場だ、日本語の上手いガイドに矢継ぎ早に料理と酒の指示を出す。タイガービールでまず乾杯！出てきたものは全てうまかった。原さんの旦那さんが日本から本ワサビと醤油の小ビンを何本か持ってきて、皆に振る舞ってくれた。ロブスターの身に掛けると本当に旨い。「あいつら、根性がないんだよ。空気吸い過ぎなんだよ！・・・もう一緒に戦争しないって言っていましたよ！」スキューバー・グループはドイツの友人が出来たらしい。「紹興酒を貰おうか！」内田さんが気を使う。原さんの奥さまもニコニコしている。磯部さんも乾さんも、味にうるさい森山さんもお満悦だ。本当にほんとうに、キナバル山に登り、こうしてテーブルを皆さんと囲んでいるのが信じられない。ありがとういい仲間だ。・・・

翌日19日のテングザルのいる動物園やイスラム教のモスク、ガヤ通りのサンデー・マーケットなどコタ・キナバル市内見物も楽しかったですが、紙面の都合でここも割愛させていただきます。

20日の朝、コタ・キナバルを飛び立つとすぐ、飛行機の窓から別れの挨拶をするかのようにキナバル山のあの山頂がほんの一瞬だけ見えた。よくあんなところに登れたものだ！！今回の旅行は、一生の楽しい思い出になることでしょう。

皆さんどうも有難うございました。こんどまた海外の山に登りましょう！！えっ！キリマンジャロ！！　うう～ん、それまで体力が続くかなあ？！

(おわり)